



みづうみ

鬼風神GO

日記

日よう日にぼくはおじいちゃんと、おともだちのゆかちゃんと、みづうみにいきました。みづうみへはおじいちゃんのトラックで行きました。ぼくとゆかちゃんはトラックの後ろにのりました。風がびゅうびゅうとなってジェットコースターみたいでした。とちゅうでゆかちゃんが気持ちわるいと言って、コンビニによりました。

みづうみにつくとぼくはすぐに水ぎにきがえました。ゆかちゃんもきがえました。おじいちゃんは水ぎにはきがえずに、パンツだけのかっこうになって入りました。水はとても冷たかったけど、気持ちよかったです。

深くてこわかったのでぼくが泳がないでいると、おじいちゃんがみづうみのまん中まで連れていってくれました。天気がよかったので、みづうみのそこまで見れました。とてもきれいに見れたので、およいでいるのではなくて空をとんでいるみたいでした。それでもぼくを支えているのはおじいちゃんの手だけなので、いつか水のそこに落ちるかもしれないとふるえていました。

ぼくはおじいちゃんに、ぜったいにここにはかいじゅうがすんでいるよ、と言うとおじいちゃんも、そう、だからあまりここであばれちゃいけないよ、と言いました。

ゆかちゃんが少しおぼれました。一回ぼくもおぼれそうになりました。おじいちゃんが手をはなしたのです。体が全部水の中に入りましたがあまりこわくありませんでした。水の中から見ただけの景色はゆらゆらとゆれてやっぱりきれいでした。

ゆかちゃんは水がつめたいと言ってまた気持ちわるくなっていました。

本当にとてもとてもきれいなところでした。たぶん大きくなってもこのみづうみのきれいさは、どんなことばを使っても言うことはできないと思いました。

だからぼくはビデオで見たことのある「せかいいさん」にこの風景を送ろうと思いました。きっとこのみづうみは「せかいいさんに」なると思います。

夢

その夢は決まって、親戚一同の歓声にも似た笑い声で始まる。まだ僕が小学生の頃だ。

なぜそんな状況になったのかは覚えていない。ただその頃はとにかく近しい者たちで集まり鍋を囲めば、どんなにつまらなく些細なことでも賑やかになるようなことが自然に飛び出してきていたような気がする。

祖父の登場は衝撃的だ。顔は真っ赤で、身体はふらつく完全な酔っ払いだ。皆の表情は少々引きつっている。それぞれが見てはいけないものを見てしまったような苦々しい顔つきだ。なぜか祖父はドアから顔しか出さずに、にやついている。

記憶の中の祖父は、大半が酔っているものだった。だから祖父のイメージは「酔ってみんなを困らせる」という後ろ向きなものが常に先行する。もちろん素面のときは、世の中の全てのつらいことを笑い飛ばすような快活な祖父なのだが、どうしても酔っ払ったときの印象のほうがそれを遥かに凌駕してしまうのだ。

祖父はそれぞれの胸中に抱えた思いなどは当然意に介してないような様子で、転がるとポンポ

ンと跳ねそうな大声を張り上げる。

「沖海志朗、ただいま『やまさん』より帰還しました！」

やまさん、は近くにある居酒屋である。口調は軍隊みたいな固いものだが、いかんせんこちらからは顔だけしか見えないので、かっこがつかない。

今でこそ、「アル中寸前の元気なおじいちゃん」という散々なイメージが僕の中で定着してしまっている祖父だが、幼い頃のイメージは全く違っていた。そのときの世の中では祖父が一番おもしろい「大人」だった。

見えない網でがんじがらめになって、とても動きにくそう。それが子供の僕が抱いた大人へのイメージだった。当時の僕が見ていた大人なんて、ひどく一面的なんだろうけど、親戚同士で集まったとき際には意味も無く互いを褒めあい、くだらない話題で大笑いし、無駄に時を過ごしているように感じたのだ。

その点祖父は気に入らないことがあるとすぐに殴り合いのけんかになったし、酔ったときの行動は常軌を逸していた。小学生の僕は祖父に、一種の可能性を感じていた。今度は一体どんなおもしろいことをしてくれるのだろうか。自由を奪う網なんてこれっぽっちも見えなかった。

この夢でもそうだ。いきなり開け放たれたドア、祖父の隣にはバス停があった。いや、この場合は、居た、と説明するほうがしっくりくる。僕から見たそのバス停は、とても恥ずかしそうにしているように見えたからだ。実際、全体的に赤らんでいたかもしれない。

「よーし！ これからは家にもバスが停まるようになるけん、便利になっばい！」

耳をつんざくような声に、窓がビリビリと音を立てた、気がした。

メール

携帯の着信音で目が覚めた。無意識に時計を見る。八時を少し回ったところだった。こんな早い時間帯に、と毒づきながらも携帯を手取る。ディスプレイには「沖海理恵子」と表示されていた。

「はやいよ」

「もしもし？ なんね？ 何が早かど」

「まだ八時じゃん」

「なんば言いよつとね、お母さんなんて毎日六時には起きてから――」

寝起きに母の金切り声はきつい。

「分かった。分かりました。ごめんなさい。で、用件は」

「今年は夏休み帰ってくるやろ？」

「ああ、うん」

去年は東京の生活に慣れることに精一杯で、一回も帰っていなかった。特に帰る必要性は感じていなかったのだが、口から反対の言葉が出る。寝起きに帰る帰らないのようなことで言い合いをしたくない。

「そういえばこの前、あんたが昔描いた作文ば見つけたよ」

「作文？」

「ほら『みずうみ』のすをつに間違っ書いてたやつ」

「ああ」と言って僕は寝起きの頭を回転させる。その記憶はすぐに呼び起こされた。クラスの前で教師に指摘され、大恥をかいたことは未だに苦々しい思い出だ。「いいよ、今更そんなもの。捨てなよ」

「よかやんね。お母さん懐かしか」

「用件はそれだけ？ もう切るよ」

「うん分かった。じゃあ気をつけて帰ってきんしゃいよ。バイチャ」

「おい、ねえ、バイチャって」

会話は母の奇怪な言葉で終了した。用事はそれだけだったのだろうか。一抹の不安を覚えながらも再び横になる。

眠れずにすぐ起き上がり、僕は寝起きの心地よい倦怠感を持ってあましながら、虚空を見すえた。

焼肉定食

教授の平坦な声は、順調に多くの学生を眠りの世界に誘っているようだった。僕も例に漏れず、あくびをかみ殺すことに苦勞していた。

何とはなしに、今朝見た夢のことを考えてみる。祖父とは年齢を重ねるごとに、会話をしなくなった。盆や正月に訪れても挨拶を交わすぐらいだ。何であんな夢を見てしまったのだろう。

盆に再び訪れることを思って、気持ちが暗くなっていることに気づいた。どんな話題を持ち出

しても、長く続きそうにない。期待できることと言えばこづかいをくれることだ、などと想像をしている自分に再び失望する。

ようやく昼食の時間になり、まず僕は学生食堂に足を向けた。定刻よりも早く講義が終わったせいか、人はまばらだった。ラッキーだ。僕は指をパチンと小気味よく鳴らし足取りも軽く、食券を買い求める。

準備は整った。食べる前に手を合わせ、お肉の柔らかい食感を楽しもうか、いやまずは味噌汁からだ、と無駄な葛藤を試みる。

まずはお肉に箸を伸ばした。甘辛いタレが、こちらの食欲をさらに刺激してくる。ご飯を口に入れながら思う。近くのちょっとお洒落でリッチな洋食屋に行ってるやつ、学食なめんな。

僕はゆっくりと食を進めた。ご飯は一粒も残さない。祖父との約束だ。

帰省

アパートから各駅停車、新幹線、特急を乗り継いで六時間をかけ僕は実家へと向かう。飛行機は絶対に使わないと心に決めていた。少々古風な考えかもしれないが、何であんな凶体のかい代物が空を飛ぶのかが理解できないからである。

改札を抜けると、そこには両親の姿があった。別れてまだ半年も経っていないというのに、二人ともどことなく老けたように見える。

「おーい、聡」

父が両手をちぎれんばかりに振っている。恥ずかしい。父の明るさの十分の一でも僕に遺伝していればと思う。

挨拶もそこそこに、駐車場へと向かう。駅を出るとすぐに熱気が押し寄せてきた。東京よりもいくぶん暑さの度合いが大きいように感じるが、緑が多いせいだろうか、こちらのほうがまだ我慢できる。

父の愛車カローラに乗り込み、自宅へと向かうなか、矢継ぎばやに質問してくる両親に適当に返事をする。

窓の外には、オレンジ色に染まった田園風景が広がっていた。すでに五時を回っているが、まだまだ陽は落ちそうにない。

「どこかに寄ってくね」父が訊いてくる。

「いい」

「方言、出んごとなったね」

「標準語になじんだから。てか暑いね。もう少しクーラーきかせてくんない」

父は空調のつまみを操作するついでにラジオをつけた。訪れたことはないが、ハワイのビーチを想像してしまうような、アップテンポで陽気な音楽が流れてくる。

「じゃあ、まっすぐ家に帰るけんね」

家に到着し、僕はまず入り口で立ち尽くすことになった。記憶が確かならば、引き戸のはずな

のだが、戸をまさに「引く」ところにはなぜかドアノブが付けられている。

「何これ」

「びっくりしたやろ」父が、どうだという誇らしげな表情をして近づいてくる。「開けてみんしやい」

言われた通りに、ドアノブを捻ってみるがびくともしない。まさかと思って、右方向にそのままスライドさせると、今度はすっと開いた。何の意味があるのだ。

「何これ」

「ははは。おもしろかやろ。ドアノブと見せかけて、実はただの取っ手なのだー」

もう、呆れるしかない。父の隣では母も同じように笑っている。こっちは長旅で疲れているというのに。

両親はあるときから通販で様々な買い物を始めた。それが実用的なものならばまだしも、用途が知れない変てこなものばかり購入するのだ。実質的に被害を受けるのは僕だけである。

奇行とも言うべきその趣味は両親に絶大な効果をもたらした。以前と比べものにならないぐらいに仲が良くなったのだ。いや、もうラブラブと言ってもいいほどに。

玄関から上がろうとすると再びそこには、理解に苦しむ代物が綺麗に三つ揃えて置いてある。ビーチバレーで用いるようなゴム製のボールの上に、スリッパがくっついている。今度は何だろう。頭痛がしてきた。

「これは」

「気づいた？ これはねえスリッパに平衡感覚を養える機能を追加した、その名も『月面歩行』で言うところよ」次は母が嬉々として、説明してくれる。「家の中で、宇宙にいるような浮遊感を味わうことができるよ」

父と母は器用にそのスリッパを履き、リビングに消えた。一応僕も履いてみるが、すぐにバランスを崩し、尻もちをついてしまう。脱げたスリッパのボールがポンポンと飛び跳ね、笑っているようだった。

調査

夕食はカレーだった。何もやっていない僕が言うのも失礼だが、母は料理は上手いほうではないと思う。特に食材にこだわるというわけでもなく、作るものは大半はレトルトで、あるときは一週間レンジでチンするだけのカツ丼というときもあった。

カレーは母の数少ない料理のレパートリーの中でも、一番の得意料理だろう。当然辛さは父と僕の希望するものになっているし、具の大きさ、ルーのなめらかさも丁度よい。

カレーを三人で食べて僕は初めて、帰ってきたのだなと実感した。しばらくはスプーンに食器が当たったり、食べものを咀嚼するときの音が部屋を満たした。

「ママ、がばいおいしかよ。おいしくてほっぺどころか、脳みそも溶けちゃうかもしれん」

「まあ、ありがとう。でも溶けちゃ嫌よ。ずっと元気なパパでおって」

両親は仲がいい。いや深く愛し合っている。僕が中学に進学するまではほぼ毎日ケンカが絶えなかったのだが、僕が中学に進学してからはこのように子供の前でも平気でいちゃついたりする。

なぜそうなったのか理由は定かではないが、熟年夫婦の離婚が増加する現代では微笑ましい夫婦の在り方なのではないかと僕は思うようにしている。

「じゃあママ、アーンして」

「んもう、聡がおるやんね。恥ずかしか」

「よかやんね、はい」

あーんと父が間延びした甘い声を出し、母にカレーを食べさせる。少しいたたまれなくなった僕は、早々に食事を終え、風呂に入ることにした。

「ああ聡、風呂上がったら話があるけん」

「話」

「まあそんときに説明すっけん、はよう入ってきんしゃい」

何事かと訝しみながらも、僕は準備をして風呂場に向かう。背中から母の、お父さんアーンして、という声が追いかけてきた。

「おじいちゃんがね、浮気しとるみたいなのよ」

母のその言葉に僕は思わず、ガリガリ君を床に落としてしまった。清涼感溢れるソーダ味の薄い青に染まった氷が、見る間に水分に変わっていく。

「まさか」慌ててティッシュで拭き取りながら、訊き返す。酒に酔っ払うとどうしようもなくなる人だが、今の年齢になってそんなことはしないはずだ。

「おじいちゃん、この前引退したやろ？ それで時間ができたとは分かるばってん、毎日のようにどこかに出かけとるみたいやっつよ」

祖父は今まで大工をしていたのだが、ついに体力の限界を感じたのか、隠居生活に入ったのだった。

「確かにそれは怪しいけど、だからといって浮気っていうのは」

「女性の写真ば、持っとなんしゃったとよ」母はこちらに目尻に皺が増えた顔を寄せ、声をひそめ

て言う。

「写真？」

「うん。おばあちゃんがどうしても気になって調べたみたら、財布の中に。そいでね、その写真ば、じっと見つめとったって」

「どういうことなのだろう。今まで僕は、酒を呑んだことで起こった事件には数多く遭遇してきたのだが。」

「今まで、そういうことはあったの？」

「なかよ。もう結婚して何十年もたつばってん、そういうことは一切。だからおばあちゃんも困っとるやんね」

「そりゃあ、俺も心配だけど、どうしようもないでしょ」

すると父と母が目配せをして、いきなり正座になった。

「何だよ」

たじろぐ僕にまず父が口を開いた。「聡、ちょっと調査してくれんね」

「ばあちゃんが、どうしても真相が知りたかて言いよんしゃつとよ。お願い」と母。

「は？ 調査？」

「ちゃんと報酬は支払うけん」

そんな急に無理な要請をされてもどうしようもない。「嫌だよ。そもそも、俺は夏休みだからこっちに帰ってきたんだよ？ 何でそんなことさせられなくちゃ」

「へえ、そんなこと言うてよかと」さっきまでの、懇願するような目の色が二人から失われた。今は僕を睨んでいる。「別によかとよ、調査せんでも。その代わり夏休み以降の仕送り無しね」

「へ？」仕送りを止められると、相当生活を切りつめないといけなくなる。「そんなの卑怯だ」

僕の抵抗は、負け犬の悲しい遠吠えにしかすぎなかった。

「はっはっはー！ 悔しかったら、自分一人で生きてみんしゃい！」

「……ます」

「んー、聞こえんやったなあ」父が大げさな身振りで耳に手を当てる。「もう一度」

「やります！」

両親の笑い声は、まだカレーの匂いがほのかに漂う部屋に響き続けた。

秘密基地

一夜明け朝食をとったあと、とくにやることもなかったので僕は散歩に出かけることにした。自動車が通るための道路以外は、田んぼしかない。

日差しは容赦なく照りつけているが、まだ膝丈ぐらいにしか伸びていない稲を風が通り抜けるときの、ざー、という音が多少は気を紛らわせてくれる。

道路を避け、草が好き勝手に生えている農道をぶらぶら歩いていると、もう景色に飽きてしまっている自分に気づく。

鉄橋の下に行きついた。この先は幅五十メートルほどの川が流れていて、土手を上がると空の

ように青いペンキで塗られた鉄橋を間近で見ることができる。

思わず顔がほころぶ。日陰でひんやりと冷たい空気や植物の湿った匂い。その全てが記憶の箱を刺激してくる。

昔友だちとここに秘密基地を作ったことを思い出した。もちろん何かの施設を建てたというわけではなくて、ごぎを敷くだけのお粗末なものだったのだが。

けれど、当時の僕はそこが憩いの場所だった。仲間以外は誰も知らない場所でくつろぐことは、何とも言えない優越感を与えてくれた。

皆でごぎに寝転がり、電車が過ぎ去っていく様を眺めていた。ときには鉄橋を登り線路から顔を出すこともしていた。危険なことをしていたものだ。

それにしても、面倒くさいことを押し付けられてしまった。

何もなかったら、それでよかやんね。ばあちゃんも安心できるやろうし。とにかく真相ば知りたかだよ。

母はそう言うが実際に調査をやる者のことも考えてほしい。これではそこら辺の興信所と大差ないではないか。

突然目の前が暗くなった。一瞬の浮遊感ののち、僕は尻からそこに着地する。

どうやら落とし穴のようだった。葉っぱが敷き詰められているが、尾てい骨を打ってしまって、痛い。

「動くな」

突然声をかけられた。上を仰ぎ見るとそこには二人の子供がいた。兄妹なのだろう。おもちゃの弓矢を持っている男の子の背中に隠れるようにして、女の子が怯えた目つきでこちらをうかがっている。

「基地を壊しにきたとやろ」

「違う。それより、早くあげてくれ」その穴の大きさは幅で両手を広げたぐらいで、長さは僕の背丈の二倍はあろうかという大作だった。よじ登ろうとすると、矢が飛んできて、見事に僕の額に命中する。ゴムの吸盤が先についているものだ。

「動かんでって！」

男の子の声は恐怖のせいか上擦っていた。

「昔は俺と友達の基地だったんだ」

「嘘だ。ここはずーっとおいたちの基地やもん」

「嘘じゃない。そこら辺に野いちごなってるだろ？ いつも食べてた」

男の子の目から若干、怒気が抜けたようだった。「ほんと？」

「甘そうに見えて、すごく酸っぱいんだよな」

尻の骨は相変わらず悲鳴をあげているが、嬉しさがこみ上げてきた。ここは何年たっても、子供の心をつかんで離さない。

携帯が震えた。母からのメールだ。

『おじいちゃん出かけるみたい。至急戻れ』

「おいロビンフッド、緊急要請だ。行かなきゃいけないから早く助けてくれ」

少しばかりすると縄ばしごが投げ入れられた。僕はそれを使って脱出する。

「お兄ちゃん、誰？ ロビンフッドって何？」

「俺はにわか探偵だよ。ロビンフッド知らないのか。小説読んだこと……まあいいや、それじゃ」

二人に声をかけ土手を降りる。彼らは急にボールを投げられ、そのまま走り去られた者のように、戸惑った表情で僕を眺めていた。

ワゴン

家に戻ると、見慣れぬ車が一台停まっていた。白い軽のワゴンでボディには英語の筆記体を模したような字が描かれてある大きなステッカーが、そこかしこに貼られてある。派手な車だ。

怪しみながらも家に入ると、母の金属を擦り合わせたような高い声が迎えてくれた。

「どこ行っと思ったとね。いつ連絡きてもよかごと、近くにおんしゃいって言ったろうが」

「いや、ちょっと落とし穴に」

「なーにが、落とし穴ね。そがん冗談おもしろうなか」

僕は恐らく青あざができていであろう尻を見せようとしたが、やめた。情けなさすぎる。

「とにかく、はよう出勤しんしゃい。ずっと待っと思ったとよ」母が手でリビングのほうを指し示す。

ドアから顔を出しているのは、全く知らない女性だった。金髪で化粧も派手だ。このような人種の友人はいないはずだが。

「あの、どなたですか」

「何？ 覚えとらんと」

金髪女が大きな足音を立てて僕に近づいてくる。きつい香水の匂いと、キャミソールにデニム生地 of 短いスカートという露出しか意識していない服装も相まって、僕はさらに辟易した。

「あんたいつも遊んどったろうが」

母は平然としている。この姿に驚かないのだろうか。

「聡さいてー」

何でこんな女に侮辱されなければいけないのだ、と鼻息も荒くしていると腕にコースターほどの小さな染みがあることに気がついた。

「……あ、もしかして由夏」

「ぴんぽーん！ てか遅いよ」

「腕見たら分かったよ。ミッキー」

「そう、案外役に立つとね」

由夏の腕の染みはミッキーマウスのような形をしているのだ。それにしても、何だこの変わりようは。会えたことは嬉しいが、単に思い立ったというだけの理由で来ることは難しいはずだった。

「ほら、聡」母が急かす。

「由夏、行こう。それじゃああの車も」

「わたしの。かっこよかやろ？」

「ああ……まあ」

慌しく家を出ようとする僕に、母が陽気な声をかける。

「行ってらっしゃーい。おいしかご飯作って待っとうけんね」

「行ってきます」

母を軽くにらみつけながら、僕は夏の光に対抗するかのよう派手に輝く車に乗り込んだ。

由夏

「ほんと、久しぶりね」

「うん」

車内には外人が早口で喋るように歌う、がちゃがちゃした音楽が流れている。言葉は英語だということは判別できるが、意味は分からない。シートは羽毛のようにふさふさしていて、ハンドルも皮張りのでかい。ルームミラーには「LOVE」という形に加工されたごついネックレスがかけられ、左右に揺れている。視界が悪くならないのだろうか。

「そがん珍しか？」

乗ってからきよろきよろとしている僕が面白かったのだろう。由夏は笑っている。

「いや、そういうわけじゃないけど」

「いつ振りやっけ？」

ちらりと由夏の表情をうかがう。少し笑みすら浮かべて前方を見ている。あのことはもう整理がついたのだろうか。

「由夏は私立の中学校に行ったから、小学校を卒業して以来だな」

「わお。そんなになると」

「お前変わりすぎ」

「そう？ わたしはそういうことは無いと思うんやけど。聡は変わらなすぎやん」

慣れた手つきで由夏は田舎道を走行する。懐かしい景色が窓の外を流れていく。

由夏とは小学校を卒業するまで、毎日のように遊んでいた。家が近くて親も知り合いだったので、すぐに仲良くなり、母の実家へもよく一緒に行っていた。彼女の父親は教育家で中学校は県でも有数の私立を受験し、そこに進学して以来会っていなかった。母からは由夏の家族が引越しを繰り返しているらしいということや、成績が優秀などの情報だけは聞いてはいたのだが。

「こっちに戻ってきてたのか」

「うん。大学が近くやったけん」

「へえ。何ていう大学」

「多分聡知らないと思う。偏差値めっちゃ低かもん」

「もったいないな。せつかく私立行ったのに」

「もう、勉強は飽きたけん」

「お母さんも一緒に？」

「ううん。わたし今彼氏と住んどるっちゃんね」

それまでの口調が歯切れの悪いものになる。かゆくもないだろうに鼻をかいている。明らかに恥ずかしがっている。

あらためて僕は由夏の変化に驚いていた。当時は暗くはなかったが、決して人よりも前に出るという性格ではなかった。どちらかといえば、いつも僕の後ろについているような少し臆病な子供だったのだ。

いや、と僕は思い直した。それほど時が経ったということなのだろう。十年も昔のことを基準

にして考えること自体がおかしな話だ。

「何か変な想像ばしよるやろー」

運転中にもかかわらず、由夏が探るような目つきで僕の顔をのぞきこんでくる。

「考えてないよ。それより運転に集中しろよ事故るぞ」目をそらすと、由夏の足に目がいった。太腿に拳大の青痣ができていたからだ。

「それ」

「ん？」僕の指差したほうをちらりと見て、何かを思い出したように由夏はからからと乾いた笑い声を発した。「こけたとよ」

足元を見てみると、軽く十センチは超えているであろう赤色のヒールが転がっている。よくこれで歩けるものだと感心しながらも苦笑する。

「さぞ盛大に転んだと見える」

「突然ぐきってなってね。車が入れんようにポールあるやん？ それにちょうどぶつかった」

僕と由夏は一緒に笑った。そのあとふいに由夏はさっきまでの笑みをひっこめ、どこかつまらなそうに言った。

「別に何もなかよ。親とも仲よか」最後に無表情で、ぼそっと付け加える。「人は変わるとよ」

「まあな」

そろそろ目的地の駅が見えてくる頃だ。祖父はいつもそこからどこかへ出かけているらしい。僕と由夏は話題はいくらでもあるだろうに、なぜか話そうという気にはならなかった。

「あーもう！ 気まずくなったやん。聡、今度のもう」突然ハンドルを叩いて、由夏が嘆く。「あとこれからこの件で手伝うことになるけん、連絡先教えて」

慌しくアドレスを交換し、駅の近くで降りる。僕はじりじりと焼けるようなアスファルトを歩き出した。

泣き声

どうやら間に合っただけ。駅に着くとほぼ同時に祖父は現れた。僕は近くの物陰に身を隠す。

祖父の服装は灰色のスーツにワイシャツという出で立ちだった。普段はステテコにゆるゆるのシャツを着ている姿しか見たことがないので、新鮮だ。

祖父は若い頃はハンサムだったのだと母が言っていたことを思い出した。そのときはいまいちピンとこなかったのだが、あらためて見てみると背の高さや大工仕事で得た体格は、祖父を年寄りと呼ぶには失礼なほどの精悍さを醸し出している。

辺りに甲高いブレーキ音が響かせ、電車が到着した。祖父が乗り込む。僕も続こうとしたが、小さな駅で人の数が少ないため、すんでのところで踏みとどまった。

祖父が三両編成の一両目に乗車したことを確認し、発車する直前に何とか電車に乗ることができた。あとは祖父がどこの駅で降りるのか注意しなければならない。

少しの間外にいただけなのに、大量の汗でもう肌に衣服が張り付いている。腕時計で時刻を確認すると正午を回ったところだった。短時間で気温が急激に上昇したようだ。空腹と喉の渇きを感じつつ、僕は何とはなしに車内を見回す。

お年寄りや学生らしき若者や子供づれの女性が、それぞれ思い思いの時間を過ごしていた。隣の車両に祖父がいることを確認し、僕は見えない位置に移動する。

ほとんど差はないだろうが、田舎の電車のほうがゆっくりと移動している気がする。心地よいほどの揺れに身を委ねながら、僕はあの湖のことを思い出していた。普段生活をしているときでさえ浮かんでくるのだから、祖父の顔を見ると条件反射のように映像が流れてくる。

*

「どこ行くとー？」

「よかここに連れて行ってやるやんね」

「どこどこー？」

「よかけん、聡も由夏もはよう乗りんしゃい」

トラックのドアを閉める音。ばたん。僕はあの音が怖くて仕方なかった。なんでそんなに強く閉める必要があるのか、内心で首をひねっていた。

僕の心の中にある映写機はたまにその湖とそれに付随した風景を映し出す。それはご飯を食べているときだったり、大学における講義中だったり、テレビを見ているときなど容赦ない。

その記憶が再生されるたび、僕の身体は一陣の風が通り抜けたように爽やかに、だけど思い出すにはあまりにも古すぎて楽しすぎて、皮膚という皮膚がむずがゆくもなる。

正確な場所はまだ思い出すこともできない。いや、その日に戻れたとしても道は分からなかっただろう。

祖父のトラックの荷台に乗って、ひたすら遠ざかっていく見慣れた風景に不安を覚え新しい街に期待を抱き、僕は落ちないように端のほうに身を寄せ興奮していた。

「ねえ」

「ん」

「具合悪かと？」

「大丈夫」

由夏は祖父にどこか連れていってもらうたびに乗り物酔いになっていた。僕がからかって、乗ってくんない、と言っても由夏は家で待っていることを頑として拒んだ。

気分が悪いときはなるべく遠くを見たほうがいと祖父が助言をしてくれたので、僕らはトラックに乗ると、雲の形が何に見えるか言い合うという決まった遊びがあった。

「あれは……ちくわだ。そう見えん？」

「うん」

「あの雲とその上にある雲でボウシをかぶった人に見える」

「うん」

「由夏も何か言えさ」

そう催促するとしばしの間雲に目を向ける。由夏はまるで骨董品の真贋を見定めるように真剣だった。

「あのスーパーの看板の上にある雲、ドルーリーオオアゲハみたい」

「ど、ドルー……？ 何ねそれ」

「ドルーリーオオアゲハ。アゲハチョウ族の。左右の羽が斜め上にそれぞれ広がっている感じが似とる」

由夏はたまにやけに詳しいことを言う子供だった。

遊びに飽きて、ぼーっとしていると由夏がぼそっと独り言のように言った。

「気持ち悪い」

「え」

「はく」

「いかん。わああ、じいちゃんじいちゃん！」

荷台の端から道路にもどそうとする由夏をはがいじめにして、トラックをコンビニに停めてもらう。僕は荷台に乗ったまま帰りを待つ。目の前に広がっている田園風景は見慣れたものだが、あきらかに空気というか雰囲気はよそよそしい感じがした。

すっきりしたのだろう。由夏は案外元気そうな足取りで戻ってきた。祖父が緩やかに笑う。

「気持ち悪うなりそうなときは、遠くば見んしゃい」

「見てたよ？」

「もーっと遠くばさ。空を飛ばんと見えんようなところを見れば、車に乗っとらん気さえするけん」

「そがん遠くは見えんよ」

祖父はそれ以上は喋らず、運転席に戻った。さっそく僕と由夏は空に目をこらしてみたが、やはり雲しか見えなかった。

目的地に着くと僕と由夏は荷台を飛び降り、祖父の制止も聞かずに駆け出した。そこは森の入り口で、人が通れるようにならされた小道を抜けると突然視界が開けて、木に囲まれた海が現れた。そのときの僕には湖という存在を知らなかったのだから、海にしか見えなかったのだ。

僕たちは言葉にならない叫び声を上げると。猛スピードで水着に着替え水に入ろうとした。

「危なかよ」

直前に祖父に注意されたところで僕らはすんでのところで立ち止まり、しょうがないので中をのぞきこむことにした。確かに浅いのは歩いて二、三步の距離でそれから先は底が確認できないほど深くなっているようだった。

由夏は早々に怖気づき、砂遊びを始めた。僕と祖父は準備体操をせず水を浴びることから始めた。肌が縮こまって身体が小さくなるかと思うほど水温は低く、驚いた。それでも僕はそろそろと湖へ歩を進めた。

まるで柔らかい氷の中に侵入するように身体は異常な温度に飛び跳ね、液体と一つになっていた。あらためて目をこらしても底が見えなかったのだから躊躇しているとふいに身体が軽くなった。祖父が両手で僕を支えてくれたのだ。

足がつかないという感覚がおもしろかった。

「飛びよるみたい」

「うん。聡、こうしたら飛ぶことができるよ。下見えるやろ」

視線を落とすと何とかおぼろげに水底を確認することができた。深すぎて距離がどれくらいあるかなど見当がつかなかった。

「いろんなことが空を飛んでいるように見えたらよかとけな」祖父が誰にともなくつぶやいた。

突然ばしゃばしゃと音がした。見やると、由夏が手足をばたつかせて溺れている。

急いで祖父が助けに行く。そのせいで僕は底なしに近い底を持つ湖に投げ出されてしまった。

不思議と恐怖はなかった。口から発せられた空気のあぶくが上がっていく。祖父が泳いでいたが無音だった。そこは全てが淡い青色に支配されていて、存在するのは僕たちだけのように思えた。

由夏の行方を心配しながらも、僕はつかめそうな一筋の光を届ける太陽に手を伸ばしてみた。

尾行

祖父はしっかりとした足取りで、ある目的地に向かっていく。ハンカチを取り出して汗を拭いては歩を進めていた。地図だろうか、手に持った紙束を見ては場所を確認するような素振りを繰り返している。

空からはじりじりと肌を焼くような太陽光線が降り注いでいる。僕は途中の自動販売機で買ったスポーツドリンクを喉を鳴らして飲みながら、ある程度距離をとって尾行していた。

いつまで炎天下の下で歩き続けなければいけないのだろう。この一件の依頼を承諾したときの父と母の笑顔を恨めしい思いで頭に浮かべながら、早くも僕は嫌気が差していた。

自分が子供だった頃を思い出す。暑い寒い関係なくどこにでも出かけていた。今日の前には小学生の僕がいる。鈍く光る浅黒い日に焼けた肌は、真夏の冒険で得た勲章のようだ。それでも表情はさえない。何かを声になる一歩手前のところで押しとどめている。僕は訊く。お父さんとお母さんは元気？ 以前と比べて、両親は本当に仲がよくなった。

住宅が立ち並ぶ道路を歩いていると、祖父がある一軒の民家に入っていく。僕は電信柱を背にして隠れ、様子を見る。ごく普通の二階建ての家屋だった。もしかすると、ここに祖父の浮気相手がいるかもしれないのだ。

数分もしないうちに祖父は出てきた。何やら言葉を述べて頭を下げていく。顔を上げたときの表情は落胆の色が滲んでいたが、また歩き始めた。

僕も再び追跡を開始する。事情は分からないが、少なくとも浮気をする表情では決してなかった。「佐々木」と表札にある名字を一応メモにとる。

その一連の行動は何度か続いた。どうやら誰かを探しているようだ。僕は祖父の表情が気になっていた。

家を出てきたときはとても残念そうな顔をしているのに、安堵したように軽く息をつきどこかほっとしているようにも感じたからだ。これは何か複雑な事情がありそうだ。

それは尾行を開始してから、二時間ほどたってからのことだった。最初は錯覚かと思った。祖父の身体が左右にふらつきだしたからだ。まるで酔っ払いのように、たたらを踏んでいる。ついに祖父はゆっくりとアスファルトに尻をつけてしまった。

慌てて祖父に駆け寄ろうと身を乗り出したところで、通りがかりの日傘を差した女性が先に声をかけた。祖父は手を大丈夫だと言うように振り、しっかりとした動作で立ち上がった。あまりの暑さに立ちくらみしたのかもしれない。

もし近くに誰もいなかったら、ということ想像してしまう。両親はこんな場合も想定して僕に尾行を頼んだのかもしれない。

そのあとは何事もなく、祖父は再び電車に乗り込む。どうやらもう別の場所には行かないようだ。一日目の調査がとりあえず終わったことに胸を撫で下ろしながら、僕は窓の外に目を向けた。

家に戻ると、玄関から母が出迎えてくれた。例のビーチボールがくつついたスリッパを履いて飛び跳ねながら、訊いてくる。

「どがんやった？」

「まだ一日目だよ。何の成果もない」疲れもあってか、ぶっきらぼうな対応になってしまう。「暑いなか何軒も家をまわってた。どうしてかは分からないけど」

「そうね、まだ初日やもんね。それより、よう頑張った。ご飯用意しとっけん」

家族三人でそうめんをちゆるちゆるとすする。相変わらず父と母は気持ちが悪いほど仲が良く、つゆが入った器を持った手を交差させお互いの口に麺を運んでいる。

「行儀悪いよ」

僕が指摘すると二人は、怒られちゃった、とバツが悪そうな顔になり恥ずかしそうに目配せをして、通常の食事に戻る。

父は食べ終わると、何やら箱を持ってきて部品のような物を取り出してきた。もともと何かの作業に取り掛かろうとしている。

「もおー、食事中やのに」そう言う母の顔はしかし、にやにやしている。

「何それ。プラモデル」

「何だと思う？」父はまだ大小いくつもの透明な袋に入った部品を取り出している。

「……城とか」

「家だよ」

「家」

「うん。三十五分の一スケールで、現在では幻のクリバヤシホーム製の復刻版だ」

すごいだろ、というようなニュアンスが言葉の端から伝わってくるのだが、全く意味が分からない。母はたとえば、窓の配置が何とも言えないのよねえ、などと言いながら、うっとりとした表情で父の作業にみとれている。

二人のことは放っておくことにして、僕はテレビを見ることにした。リモコンを探していると、ドラえもんのような二頭身の機械が持っていた。マジックハンドをそのまま取り付けたような手にリモコンがセットされている。

どうせこれも理解できやしないよ。頭のどこかで誰かがが忠告するが、僕は訊く。

「何これ」

「それはね、自動リモコンって言うと」言うが早いか、母はその機械を操作し始める。「頭にボタンがあるけん、見たいテレビ局の番号を押すと」

するとそのロボットはややあって、ギギギと何かが軋む音を発しながら、持っているリモコンをテレビに向ける。画面が野球中継に切り替わった。

一体何なのだ。このロボットの存在意義が分からない。だいたいどこでこんなものを買えるのだ。僕は自分でやったほうが早いと指摘することも忘れ、混乱した。

「お利口さんやろ」

もう着いていけないと僕が部屋に行こうと立ち上がったところで、携帯のメール着信音が鳴った。由夏からだ。

飲まない？ とだけ書かれてあった。これ幸いと僕はすぐにいいよと返信した。近くにあるという居酒屋で飲むことになった。

「由夏ののんでくる」

それだけ告げると、僕は家をあとにする。母の、飲みすぎたらいかんよー、という間延びした声が背中に響いた。

着信

『囲炉裏』という名の居酒屋に到着するとすぐに由夏がやってきた。昼間の服装とは違って細めのパンツに、ほとんど下着と言っていいような肌を覆う面積が極端に少ないタンクトップを身に付けている。

店の中に入り、腰を落ち着ける。別に囲炉裏があるというわけではない。畳の上に座布団が置いてあり、木製のついたてで仕切られている。

「田舎の居酒屋って感じでいいな」

「うわ、何ねそれ。もう東京人って言うത്？」

正直な感想の述べたつもりだが、由夏はあからさまに不快感を露にする。

「そんなんじゃない。いい意味で言ったんだ」

すると由夏は甲高い声で笑い出した。昔は静かに微笑むだけだったのに。

「何だよ」

「いやー、すぐむきになるとこ昔と変わらんって思ってた」

「お前こそ、会わないうちに何があったんだ」

「まあ、何ていうの？ やっぱ楽しく生きたほうがよかやん、みたいな」

幼い頃由夏は今のようにお喋りでも、どちらかと言えば明るいほうでもなかった。何か感じたことがあったら短い言葉を発して、僕がそれを受け取り膨らましていくという具合だ。

しかし意外に強い部分も持っていて、怒られることやつらいことがあってもじっと歯を食いしばって耐えることができる子供だった。由夏が泣いたところを僕は見たことがない。

ふいに視界が白くなった。顔面におしぼりを投げつけられたのだ。

「何ぼ一っとしとっと」

「あ、いや」

「はようお酒飲もうよ」

ビールが素早く目の前に置かれ、僕たちは乾杯した。まだ慣れない苦さに顔をしかめつつも、冷たさに喉が鳴る。

「何で東京に行ったと？」

早くも二杯目のビールを注文した由夏が訊いた。

「言ってなかったっけ。俺高校を卒業したら東京に行くって決めてたんだ。好きな教授が東京の大学にいたんだ」

嘘だった。両親と離れられるのならば、別にどこでもよかった。最初に浮かんだ地名が東京だ

ったのだ。

「ふーん。何か東京って人多くてごみごみしてて、面倒くさくなか？」

「その通りだよ」

「じゃあ何でそんなところにおるとよ」

「さあ……。一旦東京を体験しちゃうと、田舎がとても不便なところに感じちゃうんだよな」

「うわっ、なんねその都会人発言。てか方言でしゃべんしゃいよ」

「まあ、いいじゃん」

「じゃんって、やめてよ。気持ち悪か」

由夏は全身に鳥肌が立ったかのように顔を強張らせ、両腕をさすった。

会っていなかった十年近い歳月など存在しなかったかのように、僕たちは息つく暇もないほど語り合った。

それでも心中には決して小さくはない、由夏への疑問が疼いていた。なぜ由夏は今回のことを手伝う気になったのだろう。一方では懐かしさに身をゆだねながらも、僕は複雑な感情の処理に苦労した。

どこからか騒々しい音楽が流れ出した。由夏がすでに酔いのまわった鈍い動作でカバンの中を探ると、携帯が出てきた。面倒くさそうにディスプレイを見た由夏の弛緩した頬が一瞬引き締まったような気がした。ちょっと電話してくる、と一言告げると足早に店を出ていく。

「ごめん、もう帰るね」

しばらくして戻ってきた由夏は、バツが悪そうに言った。

「彼氏だったか？ 何か悪いな。もう時間遅いもんな」

「ううん、飲むって言っとったけど、心配になったみたいやけん」

会計を済まし、外に出るとねっとりとした空気が肌にまとわりつく。酔いで火照った身体がさらに熱を帯びてくる。

「じいちゃんのこと何かあったら、連絡するわ」

「うん」

由夏は今にも走り出しそうな足取りで、暗がりに消えた。挑発するように露出した背中、どこか寂しげだった。

残像

迎えにくるといふ母の提案を近いからといふ理由で断り、僕は見慣れた夜道を酒のせいで足を地面に付けているのにスポンジの上を歩いているような、どこか浮いた感覚を味わいながらふらふらと歩いていた。

見えはしないが、虫たちの金属同士を擦りあわせたような物悲しい鳴き声が耳に入ってくる。由夏との再会を祝うささやかな飲み会は楽しかったが、そのことを拒むように頭の中では一つの記憶が存在を主張していた。

由夏の父は、僕たちが中学校二年生ののときに倒れてきた木材の下敷きになって亡くなった。僕と由夏は別々の学校生活を送っていたまに由夏のことを親づてに聞くぐらいだった。

その日は台風が接近していて、風が強く雨が嘘のようにどしゃ降りになったりと天気が荒れていたことを覚えている。

下敷きになったのは由夏たち家族の新居の木材で、そしてそれを建てていたのは祖父だった。なぜそのとき由夏の父がそこにいたのかは分かっていない。もちろん由夏に訊けるわけがなかった。

事故のあと由夏と母は引越しをして場所も知らされなかったので完全に音信は途絶えることになる。祖父も責任を感じたのか、大工をやめた。

——人は変わるとよ——。

駅に送ってもらっている車中で由夏は言った。そのことにはあの事故のことが少なからず関係しているのだろう。飲み屋でどんなにあか抜けて変わった姿を見ている、眼前には口数少なく、かすかに微笑む由夏の幼い頃の姿がちらついていた。

推理

「なあ」

「ん？」

「これ、何かおかしくないか」

「そうかな。別に大丈夫やろ」

相変わらず雲一つ無い、冗談のよう快晴。僕と由夏は祖父の追跡調査をしていた。由夏は手伝うと言ってくれて、それが実現したことは心強いことなのだが、今僕がやらされていることには少々の違和感があった。

「痛いよ」

「我慢しんしゃい。真実ば知りたかとやろ」

頭上から由夏の声が降ってくる。僕は由夏を肩車していた。華奢な体つきをしているくせに、肩に足が食い込んできそうな重みを感じる。今日はスニーカーだがヒールするときにはどうなるのだろうと考えるとぞっとした。そういえば、なぜ肩に「車」と言うのだろう。

「知る前にこっちの行動がばれちゃ、意味ないだろ」

「こっちから攻めないといけんと。今じいちゃんが部屋の中で話してるの見えるけん、もうちょ

い辛抱して」

祖父は本日二軒目に訪れた家に入っていった。その際にどうしようもないと考えた僕は外で待つことを主張したのだが、由夏は何をしているのか見てみようと言って肩車をさせたのだ。

こんなことをしては、いつ警察が呼ばれるとも知れない。

「あ、終わったみたい」由夏は勢いよく僕の肩から飛び降りる。「逃ぐっよ」

肩がようやく解放され、僕はやれやれと走り出した。だが隣を見てみると由夏が顔をしかめている。

「どうした」

「着地失敗しちゃったみたい」

見やると右足を引きずっていた。

「どじ」

「うるさかね」

後ろを振り返る。祖父は別方向に行ったみたいだった。

グラスの中の緑色の液体を一気に飲み干す。なぜメロンとソーダを合わせたのかは分からないが、メロン風味の爽やかな甘味と炭酸の刺激が喉を潤してくれる。

僕と由夏は地元の駅に戻り、さらに祖父と鉢合わせすることを恐れ、僕の家近くのファミリーレストランに涼を求めた。

昼食をとるには遅い時間帯なので、客の数はまばらだった。子連れと五人組の大きな声で騒いでいる若者がいるだけだ。

「収穫なかったね」

由夏が長いコーンが突き刺さった特大パフェを突つきながら、残念そうに言う。

「まあ、しょうがないさ。尾行の真似事してるだけだもんな。足大丈夫か」

「うん」そう言って足を手でばちんと叩く。「それより、やっぱ知りたかやろ？ 何でじいちゃんがあがんことばしよっとか」

「そりゃそうだけど。この状況じゃ想像することすらできないよ」

祖父が電車でどこかに出かけていき、何らかの目的を持って訪れる家は、回を重ねるたびに少なくなっていく。それが目的の達成を意味しているのかそうでないかは分からないが、終わりは近づいているようだった。

「できるわよ」

「どうやって」

「まず写真よ」由夏はスプーンで僕を指す。動作は機敏だ。「女性の写真ば持ってたとやろ？ もしかしたらその人は、じいちゃんが昔好きだった人かもしれんやん」

「そうだとしても、なぜ家をまわってたんだ」

「それは――。てかあんたも考えんしゃいよ！」

由夏の言うとおりで。

「うーん。その女性に会わなければならない理由があったんだろうけど。そういえば見てたじゃ

ないか。俺の肩に足を乗せて」

「なに嫌味？ 見よったけど特に写真以外は何も見せとらんやったよ」

「どんな写真だった」

「どんなって、普通だよ。確かめられたのは写真は聡のお母さんが言ってた通り、カラーだったってことぐらいね」

そこで頭に過ぎるものがあった。「なあ、じいちゃんって昔戦争に行ったんだったよな」

「え……。ああ、昔見せてもらったやつね」

まだ僕らが小学生の低学年だった頃、あるとき祖父は一枚の写真を見せてくれた。なぜかは分からない。夏休みで終戦記念日が近かったので、そのせいかもしれない。

写真には、馬にまたがり凛々しい表情をした一人の青年がいた。軍服に身を包み、肩には銃をかけていた。

それから戦争の話が始まるでもなく祖父はただ、かっこよかやろ、としか言わなかった。切り取られたその場面は出征前のものだったのだろう。祖父の表情は印象に残っている。口を真一文字に引き締めても、今にもその顔はゆがんでしまいそうに、心の揺れを滲ませていた。

日本が真珠湾を奇襲したことに端を発する太平洋戦争は、高校では日本史を選択していた僕にとって深く記憶を探らなくてもすぐに頭に大体のストーリーを思い描ける「歴史」の一ページでしかなかった。

だがこんな近い者が関わったと考えると、それはやけに血なまぐさくて重大な出来事として僕の前に立ちはだかることになる。

「例えば」

由夏の声で僕は我に返る。

「その女性はじいちゃんの昔の恋人とかね」

「そんなできた話があるか」

「そがんと分からんやん。想像よ、想像」そこから由夏は何かのスイッチが入る。「戦争から必ず戻ってくるとじいちゃんは約束するが、戦後の混乱で二人は会えない。一度は忘れたかと思つた二人の愛はよみがえるのよ」

「何をきっかけに」

「それは……」先ほどの勢いはあつという間に影を潜め、歯切れ悪く由夏は言った。「何かあつたとよ」

その意気消沈ぶりが予想外に可哀相に見えたので、慌てて僕はフォローをする。

「でも戦争が関係している可能性は高いかもな」

「でしょ！」

由夏がテーブルから身を乗り出し、叫ぶ。口にコーンの食べかすが付いている。

「口、口。今日はここまでにしよう。これ以上は図書館で調べたほうがいいだろ」

市内にまで足を伸ばせば、蔵書が豊富な図書館がある。僕が高校生のとときに建てられた新しい施設で、受験のときにはよく足を運んでいた。そこに行けば何らかの情報は得られるだろう。

由夏がパフェを食べ終わったところで、どちらからともなく僕らは席をたった。

「図書館いつ行くと？」

「明日にも行こうかと思ってる。暇人だからな」

「そっか、明日は予定が入るとるちゃんね。彼氏と海に行くんだ」

「それはそれは。仲がいいことで」思いつき口をとがらせ、言う。

「そがんすねなくてもよかやん。聡も彼女作りんしゃいよ」

「うるさい」

「じいちゃんのこと、早く分かってよかね」

ピース

帰宅するとリビングから両親の騒ぐ声が聞こえてきた。またいちゃくつくところを見せられるのかとげんなりしながらを部屋に入ると、予想に違わない仲睦まじい様子で二人はああだこうだと何やら話している。

「いや、やっぱりここだって……ほら、やっぱりね」

「あら、ほんと。パパもしかして天才じゃなか」

「いやあ、ママがヒントをくれたんだよ」

どうやらジグソーパズルのようだ。まだ始めたばかりらしく、いくつものピースが乱雑に部屋中に散らばっている。

「いい歳して何やってんだよ」

そこでようやく僕が帰ってきたことに気づいたのか父と母は同時に振り返り、声をそろえて、おかえり、と言った。

「聡、これ何か分かるね」母がピースの一つを手にとり、訊いてくる。

「ジグソーパズルじゃないの」

「ただのジグソーパズルじゃなかと」近くに置いてあった箱を僕の顔の前に向けた。「じゃんじやじゃーん！」

それは写真だった。箱のパッケージには若い男女が寄り添って写っている。どこだろうか、背景にはまばゆいほどに辺りを朱に染めている夕陽が山に沈もうとしており、片隅には海も確認できる。絵に描いたようにきれいな写真だった。

考えるまでもない。これは「お父さんとお母さん」

「せーいかーい！」再び部屋には両親の声がこだました。

「思い出の写真をパズルにしますって、通販のカタログに書いてあったけん、すぐに注文したと」父が写真と同じように母を傍らに抱き寄せ、どうだと言わんばかりに笑顔で胸を張る。「ママ懐かしかね、ハワイ」

「ええ、思い出すわ新婚旅行」

熱い視線を互いに交わし始めた両親を僕は放っておいて自室に戻ることにした。

「あ、聡、今日はじいちゃんどがんやったね」

「何も。変わったことはなかった」

息子が汗水たらして頑張っているときにジグソーパズルなんて、のんきなものだ。

空腹を覚え様子を見にいくと、テーブル上には食べ物ではなく家があった。

「パズルの次は家かよ」

父が以前に紹介された何とかホームの組み立てをしている。

「聡、静かにしんしゃい。パパは今正念場なんだから」

「プラモデルの組み立てに正念場も何もないだろ」

「しーっ」

仕方がないので少し待ってみることにした。どうやらその「家」の建設は佳境に入っているよ

うで、残る屋根の組み立てに父は取りかかっている。

服についたら二度と落ちないように、どぎつい黒色をした感情が胸の底から這い上がっていることを感じていた。それは僕の色じゃない。僕の中の誰かが警告をしているのだが、抑えられそうになかった。

「昔は自分で壊そうとしたのにね」

その言葉を発したとたんに、周りの空気がぴんと張りつめた。父は手を止め、母はこちらを鋭くにらんだ。

「何でそがんこと言うのね。パパに謝りんしゃい」

身体は熱いはずなのに、出てくる言葉は冷静だった。

「別に間違ったことは言ってないよ。事実じゃないか。毎日けんかして、夜は寝ていても怒鳴り声で起きてた」

僕が上京する直前まで両親の仲は悪かった。物心ついてからというものの買い物にでかけたり、楽しそうに話しているところなんて一度も見たことがなかった。

「それがいきなり仲良くなって、二人で変なもん買い始めて、手のひら返したようにいちやつき始めて、プラモデルの家を作るって何だよ。バカにすんな」

大学生にもなって反抗期なんて最低だ。そう頭では理解しながらも僕は順調にヒートアップしていく。母は泣いていた。父はまだ手を止めてうつむいている。

「こがんと作らんでよか」

僕は製作途中の「家」を乱暴に掴むと床に叩きつけた。その瞬間にもう自分がやったことへの後悔を感じながら、僕は家を飛び出した。

父の家はとても軽かった。そのことがなぜかまた僕をいらつかせた。

勢いよく出ていくところまではよかったが、どこかにあてがあるというわけではなかった。何名か友人の顔が浮かんだが、説明がめんどくさかった。

気がつくのと、今は幼い兄妹の根城になっている秘密基地に足が向かっている。

後悔の念がだいたい胸を支配しているが、ほんの少し身体が軽くなったようだった。あんなに強く、しかも父親に言葉を投げつけたのは初めてかもしれない。ただ、母を泣かしてしまったことを考えると、やはり自分のことを呪いたくなった。

基地は静かで、しかし誰かのことを待っているように息をひそめているように夜の闇に身をさらしている。

まず僕は先日ひっかかってしまった落とし穴を探した。どうやらすでに修復をしているらしく、周辺の地面にはおうとつさえ確認できない。

ひざまづいてしばらく手の感触だけで慎重に調べてみると、明らかに地面が柔らかな場所を探し当てた。どうやら竹を棒状にして交差させその上に新聞紙、葉っぱ、土の順に重ねてカモフラージュしているようだった。その手の込みように苦笑する。

「動くな」

声変わりなど遥か先のことだと言わんばかりの小さなロビンフッドの高い声に、懐かしささえ

感じつつ、僕は慌てて名乗った。また落とし穴に落とされてはかなわない。

「俺だよ俺、にわか探偵」

「またお兄ちゃんね。そが暇かと」

「少年こそ何しているんだよ」携帯で時刻を確認する。「寝る時間だ。お母さんに怒られるぞ」

「お母さんまだ帰ってきとらんもん」つまらなそうな乾いた声が背中に届く。

そこで僕はようやく振り返り、ロビンと向き合う体勢になった。背中の影に張り付くように妹がくっついて、おどおどした様子でこちらを見つめている。

「そっか。いつも遅いのか」

「ううん。火曜日と水曜日は早く帰ってくつよ」

「そうか。お父さんは」

「お父さんはおらん。でも楽しかよ？」ロビンは心底不思議そうに問い返した。後ろの女の子も、うんうん力強くうなづいている。

ごめんと謝ろうとしてやめた。また訊き返されるだけだ。「楽しいならいいんだ」

「おいたちはパトロールばしよったけど、お兄ちゃんはどがんとしたと」

「……けんかしたんだ。お父さんと」

「どっちが悪かと？」

「うーん、お兄ちゃんかな」

「それならね、はようごめんって言わんといけんとよ。はよう仲直りせんばいかんってお母さんが言うとったもん」

ロビンの言葉は葉から滴り落ちる水滴のように淀みがなく、真つすぐだった。

「そうだな、はやいとこ帰って謝るよ」

女の子がロビンの服を引っ張り、耳に口を寄せ何かをささやいた。

「もう行かんば、お母さんが帰ってくっけん。じゃあね」

そう言うと二人の姿はすぐに闇の中へ立ち去り、すぐに足音だけになった。

玄関の前に両親が立っていた。

「どこ行とったとね、もう」

母が周りを気にもせず叫ぶ。

「ちよっと秘密基地に」再びなにごとか言おうとする母を何とかなだめ、僕は父の方を向いて、言った。「ごめん、家壊してしもうた」

「よかよか、また作り直せばいいけん。それより、方言やつと言うたな。さっき怒鳴られてびっくいたばってん、嬉しかったぞ。やっぱ方言で話してもらわんと別のクニの人みたいで困るけん」笑顔で親指を立てる。「ほら家に入ろう」

リビングに戻ると、家の部品が辺りに散らばったままだった。誰からともなく拾い始める。

「何でこがんとばかり通販で買うか教えてやろうか」

僕は目だけで先を促す。

「最初見つけたときは、くだらなくてただの興味本位で買ったとよ。引き戸に取り付けるドアノブだったり、スリッパにボールがついとったりな。初めはママも怒とったばってん、くだらな

すぎてパパと笑うたとよ」

確かにそんなに用途が不明な物は笑うしかない。

「ママと一緒に笑うたと久しぶりやった。そいから、もしかしたら作った人はそれが目的かもしれんと考えたとよ。本当にそうやったら、こんなすごか通販なかやろ？」父は僕に向かって、だいぶ白髪が混じってきた頭を下げた。「すまん。もうママとけんかはせんけん」

「もうよか」

急に気恥ずかしくなった僕は部品をいそいそと拾い集め、父に渡して自室に戻った。

翌朝リビングに行くと、テーブルに突っ伏して父が眠っていた。それを見守るように完成したあのプラモデルの家があった。僕が破壊したせいでつぎはぎだらけだが二階建ての立派な日本家屋だ。手にとって見ると瓦や障子など細部まで見事に再現してある。

僕は注意してそっとテーブルに戻した。朝の光が一階の出窓に反射して輝いていた。

戦争に関する資料

高校を卒業して以来久しぶりに訪れた市立図書館は以前の記憶のまま、多くの人が訪れていた

。夏休み期間中なので、小学生ぐらいの子供たちが多く見受けられる。さっそく僕は戦争に関する資料を探すことにした。

いくつもの背の高い棚が整然と並べられており迷いそうになったが、何とか僕は「郷土の史料コーナー」なるところにたどりついた。しばしの時間棚にかじりつき、いくつかの資料を選び、適当な席についた。

当然のことだが、ここも一九三七年に日中戦争が始まると総力戦遂行のために戦時体制が成立したそう。また一九四〇年に新しい大政翼賛会が発足する過程で政党が解散するとこちらでも政友会・民政党の支部が解散し翼賛会支部が結成されたとのこと。

何だか受験勉強でもしている気になってくる。小学生だった頃学校の課題で祖父母に戦争の頃の話聞いてくるというものがあった。

「戦争ときは焼夷弾が毎日のように降ったもんなあ」

祖父は遠くの空を眺めながら記憶は掘り起こしていた。

考えた方法は、祖父母が訪ねていた人物の名前と地域で出征した人物の名前を照らし合わせるというものだ。一致する人物がいた場合についてはまた後でどうするか考えることにした。果てしない作業になることを予感したからだ。

祖父の尾行中に取ったメモを取り出す。佐々木、西山、高木……。ここらではよく耳にする名字だらけだ。

ところどころに白黒の写真が載っている。なかなか思うような箇所が見つからず焦りを感じ始めたところで、頭の中で何かが音を立てたような気がした。それは僕に何かを気づかせようとしているようだった。

もう一度資料を眺めている。浮かんできたのはある一つの疑問だった。それは些細なことだったが、爪に入ったゴミのように思いのほか気になった。その疑問をもとにある推測をした。

僕は席を立ち携帯を使える場所に行き、母の番号をプッシュした。すぐ出てくれた母に僕は質問をして、いくつかの事項を確認した。ちょっと待ってくれと言うのでいったん電話を切り、またすぐかかってきた電話に対応する。推測はほぼ当たっていた。

「なんね、いきなり」訝しげに母は言う。

「いや、ちょっと気になっただけやけん。ありがとう」

「あ、あとおじいちゃんまた出かけてそうやけん。図書館に迎えに行くね」

飛ぶ

母に駅まで送ってもらい、祖父の到着を待つ。恐らくこれが最後になるだろう。

祖父が現れ、僕はいつものように後をつける。いくつか駅を過ぎたところで下車する。

祖父の顔色が気になった。無理もない。炎天下のなかほぼ毎日のようにスーツを着て歩き回っ

ているのだ。

そこはアパートというよりも、長屋のような建物だった。一棟を数戸に仕切るのではなく、同じ形をした一階建ての家屋が等間隔で敷地に整然とある。

入り口から一番奥のほうの家に祖父は入っていった。

待つ間、僕は祖父に今までのことを打ち明けたほうがよいか考えていた。言うにしてもどこからどこまで話せばよいか分からない。

そうこうしているうちに祖父が出てきた。表情は入る前と変わらない厳しいものだった。額の汗をしきりに手で拭っている。

今日のところは声をかけまいと決めたところで祖父が地面に倒れた。こけたわけではなく、くずれ落ちるような倒れ方だった。

身体が先に動く。すぐに祖父のもとに行き、状態を確認した。

「じいちゃん、じいちゃん」

息はしているようだが、全く反応がない。携帯を取り出し、救急車を呼んだ。声が自分のものではないかのようにかすれていた。

サイレンの音が近づいてくる。待っている十分ほどの時間が何時間にも感じた。救急隊員は素早い動きで祖父を搬入する。付き添っていこうと救急車に乗り込もうとしたところで、メモ帳が落ちていることに気がついた。すぐにしまおうと思ったが開いたページの文字が目飛び込んできた。僕はすべてを悟った。

病院に到着しても僕は落ち着かないでソファにも座らず。うろうろと辺りを歩いた。容態は安定したと医者に伝えられ、緊張がわずかにほぐれたところで携帯が振動した。

思わず声を上げそうなところを噛み殺してすぐに通話ボタンを押す。

「お母さん？ じいちゃんが倒れたけんはようきて。病院は――」何やら様子がおかしい。声が聞こえてこないのだ。「お母さん？」

「聡」

震えてかすかに耳に届く声に息を呑む。「由夏か？ どうした」

「助けて」

男の怒号が響いている。そのあとには何かが割れる音。

「何があったとか。今どこにおる？ 返事しろて」男の声はさらに凶暴性を増しているようだった。「由夏どこに」

「グリーンパークハイツ」

その言葉を最後に電話が切れた。知っている場所だった。そんな近くに由夏は住んでいたのか。

病院を出たところでタクシーを拾った。救急車を拾ったり、初めての経験ばかりだ。

暴れていたのは同棲しているという由夏の彼氏だろう。思い出すことがあった。何回か話した足の怪我のことだ。由夏はこけたのだとか言っていたが、あれは彼氏の仕業ではないだろうか。

グリーンパークハイツに到着し、肝心の部屋番号を知らないこと気がついたが部屋はすぐに知

れた。二階にある部屋の少し開いたドアからさきほどの男の声がしたからだ。

「てめえこら、なんば考えとっとか」

気圧されながらも僕はドアを勢いよく開ける。男が何度も執拗に由夏の足だけを踏みつけている。痛みを耐えかねて絞り出す悲鳴が僕の身体を冷たくした。

「やめろ」

「何だお前は」その男は若そうだったが無精ひげが生えていてふけて見えた。薄ぼんやりとした眼が少しばかり開く。「分かった！ お前やな由夏と会ったとは」

言うが早いか男は僕に猛然と突っ込んできて僕の顔を殴ってきた。なす術もなく僕は床に倒れこむ。痛い。とても痛い。

「やめて」由夏が鋭く叫ぶ。

僕はその後も殴られ続けた。半端なく相手の力が強すぎるのだ。由夏はこんな男に暴力をふるわれていたのかと考えると無性に心が締めつけられた。

「何も変わっとらん」

「あ？ お前なんばいきなり言って」

「由夏！ お前はなんも変わっとらん」

つらいことがあってもじっと耐えて乗り越えるどころか、由夏は僕に笑顔を見せてさえた。やはり由夏は前の由夏のままだ。

僕は男の腕を何とか振り払って立ち上がり、由夏のもとにいった。足にもう青痣ができています。今にも飛びかかってきそうな男を見据えながら、なぜか頭の中では祖父のあの湖に行ったときの言葉が響いていた。

——いろんなことが空を飛んでいるように見えたらよかとけな——。

僕は椅子を踏み台にして高く飛び上がった。

変わらないところを隠すことが下手で、暴力をふるわれたことも笑顔で終わらすことのできる由夏には、こんな常識外の男は絶対に似合わない。

僕の放った仮面ライダー並みのキックは、見事に男の顔面をとらえていた。

告白

由夏の手を引っ張ってとにかく目がついた角を曲がり、逃げた。気がつくやうと河川敷についていた。疲れ果て二人で、ぜえはあと息を吐きながら土手に倒れこむ。呼吸が落ち着いてくると、由夏が話し始めた。

「ごめんね。いつもはわたしを少し蹴ったら機嫌なおるばってん、今日は虫の居所が悪かったみたいやね」

「そがんことはよかけん、はようあいつと別れろ」

「うん。でもあの人わたしを分かってくれていた。わたしのどこがよくて、頑張っているのかを教えてくれたの」

「でも」

「分かっている。別れるけん」

少年野球のチームが対戦している。金属バットにボールが当たると辺りには小気味よい音が響く。今日も暑い。

「なあ」

「ん？」

「何で早く教えてくれなかったんだ」

由夏が怪訝そうにこちらを向く様子が気配だけで伝わってくる。

「じいちゃんは、由夏のお母さんを探していたんだろ」

少しの間由夏は言葉を選ぶような曖昧な表情をしていたが、ふっとそれを緩めて薄い笑みを浮かべた。

「分かったとね」

「うん」

「聡には隠そうと思っと思ったけどね」

「前に、写真はやっぱりカラーだったって言ったやろ。今日それがちょっと気になったけんお母さんに聞いたとよ。由夏には女性の写真を持っていたとしか話してないって言っと思った。あとばあちゃんに写真はカラーだと確かに確認してもらった。何でカラーだってこと知っと思ったと？」

「だって本物見たもん」

「本物を？ どうやって」

「聡のお母さんから初めてその話ば聞いたとき、怖くなったけん、懐かしくなったっていう理由でおじいちゃんに言ったとよ。そのときにスーツの中ば見て確認した」

由夏は自分がやったことを思い出しているのか、中空の一点を見つめながら話している。「そっか」これで写真のことは納得がいった。「あとはじいちゃんが回っと思った家のことだ。前に由夏のお母さんは引っ越しばかりしよるってことを思い出したと。回っていたとは全部、昔由夏が住んでたところやったとやろ」

由夏はこくりとうなずいた。「今お母さんは、県外に住んでるの」

「怖くなったって、前の事故のことか」

由夏たち家族の新居を一部の材木に下敷きになって由夏の父が亡くなったあの事故が今まで祖

父と由夏の暗い過去をつなげていたのだ。

「お父さんはわたしを愛しとらんやった。勉強のことしか言わんで、テストの良し悪しでわたしへの態度を変えとった。あの人にとっては勉強できれば、子供なんて誰でもよかったとよ。一番許せんかったとはお母さんにもがばい冷たかったことよ。毎日殴つとった。わたしも似たとかな。そういう人に愛される場所は」

かける言葉が見つからなかった。何度か由夏の家には遊びに行ったことがあるのだがそんな風には見えなかった。

「わたしがお父さんを殺したんだ」

「え」

唐突な由夏の告白に思考が止まる。野球の試合ではバッターが長打を放ったらしくばらばらと歓声が起こった。

「お父さんにできるまえの家を見てみたいって言うたと。ちょうど台風がきてるときやったけん。もしかしたら材木が倒れてお父さんが死ぬかもしれないって思ったと。そしたら本当に起きてしもうた」

「それは悪いことなのかもしれないけど、偶然」

「うん、わたしが殺したとよ」僕の言葉を遮って由夏が言った。

「もしかしてそれを知ったじいちゃんが、由夏のお母さんにそのことを言うと思って、止めようとしよったとか」

「うん。だから聡には気づかれんように戦争がどうだとか、言ったの」

「じいちゃんはそがんこと、思うとらんよ」

僕は祖父が病院に運ばれる直前に見たメモ帳のことを思い浮かべた。その文字はところどころが歪んでいて苦しみが滲み出ていた。

「じいちゃんも、俺が由夏のお父さんを殺してしもうた、って書いとったよ。じいちゃんも今まで悔やみ続けていたんだ」

由夏はそれをきくと、みるみる顔をくしゃくしゃにして泣き出した。初めて見る泣き顔だった。

「聡、聡」

「うん」

「三人でまた、あの湖行こう。溺れたばってんがばい楽しかった。すごい楽しかったけん」

「うん」

泣きじゃくる由夏を抱き顔を上げる。入道雲が空を突き抜けんばかりにあぐらをかいていた。

*

ことの真相は僕と由夏で言わないことをした。今はどう報告するか考え中だ。祖父の意識が戻ったと聞き僕は由夏と祖父の病室の前にいた。

由夏のやったことについて僕はどうこう言う権利はない。でもそれを一生由夏が背負わなけれ

ばいけないことは確かだった。由夏は緊張した面持ちで立っている。

「開くっぞ」

「うん」

僕は戸に手をかけた。